

明確になっている。したがってメーカーもはっきりディファインされた機能に対して何を与えるかがはっきりするわけです。

日本の場合自分の機械にどういう仕事をやらせるかが明確に整理されていない。したがってシステムの評価の基準が明確にならないのだと思います。

G OSというのは受注生産みたいユーザーがこれをつくってくれというものをつくるのか、それとも機械そのものについてユーザーが選択するものなのですか。

E OSは、どこまでがOSなのかという定義の問題もありますが、通常は基本ソフトウェアとよばれるものと応用ソフトウェアとよばれるものから成っているといっでよいでしょう。前者は原則として標準品であり、後者には標準品と注文品とがありうるかと思えます。ユーザーにおさめられるOSは、標準品の基本ソフトウェアとユーザーの必要性にたがって選択される応用ソフトウェア(たとえば、TSS機能、データベース機能、各種ライブラリー機能等)から構成されることになります。

G システム評価となると機械そのものとOSを組み合わせての評価になるわけです。そうするとユーザー側だけで、どのシステムがよいかということになると、あるパラメータの設定で1カ月なり1年なりやってみて、また別のパラメータで同様にやってみる、というのがいいのではないかと思います。

E ユーザーが通常行なうのは、最終的にはベンチマークということになります。すなわち、ある一定期間實際

のユーザーの計算機で走行しているジョブの統計データを収集し、これを代表するようないくつかのジョブ群(ベンチマーク)を選択します。つぎに、このベンチマークをメーカーの計算機の上で走行させて、どのくらいの性能になるかを実測するわけです。しかしこれを行なうと1,000万円位の費用がかかるのが普通のようなのです。

F それにむずかしいのは、バッチを何本か並列に流しながらTSSを走らせたり、コマンドを実行させたりするということです。このため、TSSで疑似的にそういう状態をつくることも考えています。

H そのベンチマークジョブは、疑似的に、シミュレーションというか、そういったことをやらないで、確率モデルみたいなのができれば、相当時間的にも短縮されメーカーも手間がはぶけると思えます。そして、ユーザーが納得できるようなモデルができ、解析までうまくできるようなプロセスができればいいと思うのですが。

I このモデルの評価としては、かなり強い仮定を置いてもこのモデルが経験的に合うということでしょうか。

G モデルとして有効か有効でないかは、結局実測値とどこまで合致するかという検証だと思います。その辺はよくわからないのですが、私の考えでは傾向線が合えばだいたい合ったと判断しております。絶対値そのものはモデルに盛り込まれていない要素とか、その他があるので、それが合うという自信はないのですが、いろいろなパラメータを変えたときに画かれるカーブの性質がだいたい似ていれば、そのモデルは有効であると思えます。そし

昭和53年度 日本OR学会役員

会長	小林 宏治*	(日本電気株式会社)	無任所	浅利 英吉	(東海大学・札幌校舎工学部)
副会長	千住 鎮雄*	(慶応義塾大学・工学部)	"	須永 照雄*	(九州大学・工学部)
"	横山 勝義	(海外鉄道技術協力協会)	"	水野 幸男*	(日本電気株式会社)
"	横山 保	(大阪大学・経済学部)	監事	池沢 茂樹*	(東洋信託銀行株式会社)
庶務	佐久間 峯*	(電力中央研究所)	"	西田 俊夫	(大阪大学・工学部)
"	司馬 正次	(筑波大学・社会工学系)			
"	渡辺 浩*	(筑波大学・社会工学系)	北海道支部長	加地 郁夫	(北大)
国際	島田 俊郎	(明治大学・商学部)	東北 "	松田 彰	(東北電力)
研究	小野 勝章*	(小野勝章事務所)	中部 "	本告 光男	(中部電力)
"	鈴木 光男	(東京工業大学・理学部)	関西 "	西田 俊夫	(大阪大)
編集	奥野 忠一	(東京大学・工学部)	中国四国 "	青木 兼一	(広島大)
"	竹内 啓*	(東京大学・経済学部)	九州 "	須永 照雄	(九州大)
会計	横井 満*	(日本電信電話公社)			

(*印は新任)